

体験版（DLsite 掲載用）

成人の儀式～お姉さんが童貞達を卒業させる聖なる風習～（後編）

※この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。

「川下様」

そう呼ばれ、私はゆっくりまぶたを開いた。

イヤホンを外す。

「到着いたしました。どうぞ、こちらへ」

車を降りて目に入ったのは、見覚えのない神社だった。

私は思わず首を傾げる。

十八歳まで、この町で暮らしていたのだ。
こんな立派な神社を知らないはずがない。

「……ここ、本当に地元ですか？」

黒スーツの男へ尋ねる。

「はい。山の奥になりますが、〇〇町内です」

周囲を見渡す。
あるのは、鬱蒼とした木々ばかりだった。

どうやら私は、車の中で眠ってしまっていたらしい。

現実逃避みたいなものだったのかもしれない。

その間に、町の中でもかなり山奥まで連れて来られていたようだ。

……これじゃ、逃げようなんて考えても無理だな。

そんなことをぼんやり思う。

車から足を下ろすと、冷たい風がスーツ越しに体を揺らした。

「こちらへ。着いてきてください」

男は淡々と歩き出す。

私は小さく息を飲み、その背中を追った。

木造の立派な建物。

近づくほど、その神社が古く、そして妙に格式高い場所なのだとわかる。

けれど通されたのは正面ではなく、裏手の扉だった。

少し不自然に思ったが、今さら考えても仕方がない。

私は無理やり思考を振り払う。

玄関で靴を脱ぎ、古びた廊下へ足を乗せた。

床板が、ぎしりと小さく軋んだ。

さて、今日私は、何人の男性を相手にするのだろう。

そのことが、ずっと頭から離れなかった。

小さな町とはいえ、男の人数はそれなりにいる。

高校時代、男子の性事情なんてほとんど聞いたことがない。

だから余計に想像がつかない。

私は廊下を歩きながら、“成人の儀”の封筒が届いた日から考え続けていたことを、また思い返していた。

けれど――。

よぼよぼのお爺さんを相手にするよりは、まだいいのかもしれない。

これから会うのは、二十歳の男性たち。

しかも、女性経験のない子たちだ。

そう考えると、不思議と少しだけ気持ちが軽くなった。

(中略)

やがて、ガタゴトと奥の扉が開く音がした。

現れたのは——全裸の若い男の子たち。

第一印象は、ただひと言。

……若い！ しかも、なんて芋っぼいんだろう！

田舎の成人式って、こんな感じだったっけ？ 記憶が曖昧だ。

可愛らしく自分の股間を両手で隠している子もいる。その子に、なぜか目が釘付けになってしまった。

五人。全裸の男の子は五人。

つまり、五人相手するってことか。

強面の男性が、彼らを整然と並ばせる。

「お前ら、この女性にお相手してもらうんだ」

その言葉で、五人の視線が一斉に私に向けられた。

「一礼しろ！」

五人は律儀に、ペコリと頭を下げる。

そのぎこちない仕草を見て、私は胸の奥がきゅっと締め付けられるのを感じた。

——彼らも、私と同じ境遇なんだ。

なんで知らない人とエッチしなきゃいけないんだろう。

なんで初体験を、こんな形で強制されるんだろう。

本当は、好きな人と……。

私はうつむき、小さく呟いた。

「……不憫じゃないか」

大きく息を吐き出す。

彼らの気持ちを考えたら、妙に決心がついてしまった。

「彼らが、今日の私の相手でしょうか？」

この部屋に入ってから、初めて自分の声が出た。

強面の男性が、丁寧に頭を下げる。

「はい。今日はよろしくお願いします」

よし。

私は何故か、気合いが入るのを感じた。

五人、一人ひとりの目を見つめ、軽く笑顔を向ける。

芋っぽいけど……みんな、なんだか可愛い子たちじゃないか。

きっと、自分に自信がなくて、彼女もできなかったんだろうな。

(続きは本編でお楽しみください)